



王であるキリスト (ヨハネ 18:33b-37)

どんな試練の中でも、キリストは私たちの王です

王であるキリストの祭日、年間最後の主日を迎えました。ピラトが「それでは、やはり王なのか」(18・37)とイエスに問い返した部分が印象に残りました。私たちが、「それでは、イエスはやはり王なのか」とこの世の権力者から問われている、そんな受けとめかたをして学びを得ることにしましょう。

今月は急死された方の葬式をいくつも引き受けました。ご遺族にとってはもちろん一期一会の葬儀なのですが、主任司祭は急死された方への言葉が二度三度、続くことになります。司祭も人間ですから、だんだん話すとっかかりを見つめるのが難しくなります。

それでも、何かを話さなければなりません。そのたびに、もがき苦しんで言葉を絞り出しています。そんな時に今週の「王であるキリストの祭日」が巡ってきました。

朗読される福音は典礼がA年であるかB年であるかC年であるかで違いがあると思いますが、私の中では「主よ、あなたは世々にわたって私たちの王です」という信仰を表す日曜日だと考えています。

では今置かれている中で、私はどのようにこの信仰を表すかという、「どんなに似たような状況の葬儀が続いても、誠実にミサをささげ、説教をする」これが司祭である私にとって「あなたは私たちの王です」という信仰表明です。

王であるキリストが私にこう命じているのです。「似たような状況の葬儀が続いているが、それでも誠実さを示してくれるか？」それに対して「はい」と答えることで、今の時代に「王であるキリスト」を証しすることができるのだと思います。

どの時代にも、「王であるキリスト」への忠実が求められてきました。そしてその求めに「はい」と答えてくれる人がいました。イエスのすぐそばにいたペトロは「ヨハネの子シモン、この人たち以上にわたしを愛しているか」と問われます。それに対しペトロは「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存じです」と答えました(ヨハネ 21・15)

ある人は殉教によって、ある人は誠実な人生によって、ある人は生き方を回心することで、王であるキリストへの忠実を表してくれたのです。私たちにも、自分にできる形で「キリストは私たちの王である」この信仰を表すことを求められているのだと思います。

福音朗読のピラトは、「それでは、やはり王なのか」とイエスに問いかけました。嘲りと嘲笑を受け、みすぼらしい姿をしていたイエスに、ピラトは興味も関心も無かったはずですが、それでも王なのか？と確認したのです。

イエスはいよいよ十字架のほかに残るものがない状況になって、王であると宣言します。すべての人の救いのために、十字架を選び取る王

であると、公言するのです。ここでは、イエスに敵対する人々も救うために十字架を選ぶ姿を想像しますが、イエスが十字架上で命をささげる相手は、敵対する人ばかりではありません。

福音書の中には、さまざまな苦しみを背負った人々のいやしが描かれています。会堂長ヤイロは、目に入れても痛くない娘を失いましたが、イエスによって生き返らせていただきました。一人息子を失ったやもめも、その一人息子をイエスによって返していただきました。

「どうしてこんなに苦しまなければならないのですか？」誰にも説明できないような重荷を背負った人の王となるために、イエスは十字架を担われ、命をささげてくださったのです。

この方に、「あなたは世々にわたって私たちの王です」と信仰を言い表します。イエスを信じて生きる人、イエスを信じて旅立つ人、すべての人が王であるキリストを証しする時、キリストは世々にわたって私たちの王であるのです。

私たちが信仰を表明するイエス・キリストは、すべての人に命をかけたお方です。王として、すべての人の生命財産に責任を持ってくださいます。「それでは、やはり王なのか」このピラトの質問に、「それでも、イエス・キリストは私たちの王です」と答えることができるように、準備を整えましょう。

この世の権力者、世俗的なすべてのものが、「それでは、やはり王なのか」と挑発しています。どんな挑発も、私たちから真理を奪い取ることはできません。私たちにとっての真理、それは「イエス・キリストは私たちの王です」この言葉の中に込められています。

待降節第1主日(ルカ 21:25-28,34-36)